

## 日本での複言語・複文化主義に基づく言語教育の可能性をさぐる

行動中心複言語学習プロジェクト(Action Oriented Plurilingual Language Learning Project) の試み

金田一 真澄・境 一三・倉舘 健一

Keio Research Center for Foreign Language Education

<http://flang.keio.ac.jp/>

« Action Oriented Language Learning (AOP) Project » est un projet de recherche, soutenu par le ministère de l'Éducation et des Sciences, mené par Keio Research Center for Foreign Language Education, dans le cadre de « Academic Frontier » et d'une durée de 5 à 8 ans (2006 - 2011/2014). Le projet AOP est le premier des projets conçus dans le domaine de l'enseignement des langues, et sans doute la première tentative d'étude globale sur les approches suivies au cours de l'élaboration du *Cadre européen commun de référence*. Il vise la conception d'un cadre commun de référence pour les langues interne à l'institution de Keio et servirait également à la conception d'un « cadre japonais commun de référence de langues » ou d'un « cadre commun de référence de langues pour l'Asie de l'Est ».

Dans ce cadre de recherche, en prenant compte l'ensemble du parcours d'apprentissage de langues (de l'enseignement primaire à l'enseignement supérieur), nous envisageons d'accroître la cohérence dans l'apprentissage des langues, axé actuellement sur l'enseignement de l'anglais, et d'améliorer la compétence de communication dans une situation plurilingue. C'est une démarche qui veut répondre pleinement à la demande d'amélioration de la compétence communicative, requise pour vivre sur la scène internationale. Pour arriver à réaliser cet objectif imminent, la mise en place d'un apprentissage basé sur la perspective actionnelle s'impose, bien entendu. De plus, pour améliorer cette compétence, qui permet de saisir des informations localisées et d'en diffuser en différentes langues, nous abordons de front l'aménagement de l'environnement de l'apprentissage en vue du développement de compétences plurilingues et pluriculturelles, en introduisant et en développant considérablement les échanges interculturels.

Le projet AOP est aussi un essai de transformation radicale de l'environnement de l'enseignement des langues au Japon, prenant comme base les fruits très concrets du travail du Conseil de l'Europe pour la création du *Cadre européen commun de références*. Au vu de la globalisation du marché et des échanges économiques, de la hausse du nombre de travailleurs étrangers et du phénomène « sans bornes » de circulation des informations internationales, toutes traces qui attestent d'ailleurs de l'entrée du Japon au stade plurilingue-pluriculturel, il n'est pas difficile d'imaginer une extension considérable de ce phénomène. Afin de reconstruire un système d'apprentissage pour les langues, en remettant en cause les fondements de l'enseignement des langues au Japon qui perdurent encore actuellement, le projet AOP a pour but final de les réorganiser étroitement, l'une après l'autre, sous un paradigme didactique nouveau issu du socio-constructivisme. Plus concrètement, nous envisageons d'aménager l'environnement de l'apprentissage qui

répond à ce paradigme éducatif, et à parfaire la conception de la formation en didactique des langues, ainsi que le système d'organisation des recherches de notre institution.

Ainsi le projet AOP est conçu non seulement comme un cadre de recherche sur le plurilinguisme-pluriculturalisme, sur l'apprentissage collaboratif et l'autonomie d'apprentissage, mais aussi comme un élément participant au processus d'orientation de la politique linguistique et de l'aménagement de l'environnement d'apprentissage.

## はじめに

ヨーロッパとは言語に対する政治的・文化的・教育的必要性が異なるこの日本において、『外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CECR) 』(2001年)が依拠する理論的背景が広く受け入れられ、示された指針が共有されるのは容易なことではない。そこにはわれわれ一般に欧米語の言語教育を生業とする者たちの想像を遥かに超えた困難や認識の隔たりが待ち構えていることだろう。また実際にこのような状況を迎えることが望まれているのかについても十分に議論がなされておらず、依然不明であるといわざるを得ない。

しかしながら、今大きく変貌を遂げようとしている東アジア地域の社会情勢の中で、偏に平和希求の観点から、言語教育政策を再構築しなければならない時期を迎えていることは確かである。言語教育に携わるものとして、さらにヨーロッパを形成する一言語の教育に関わるものとして、CECR で作業された先駆的な試みを各々の社会活動の中から吟味し、教育の現場に還元していくことが求められている。

このような認識に立ち、2006 年より文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア拠点として慶應義塾でスタートした「行動中心複言語学習 (AOP) プロジェクト (Action Oriented Plurilingual Language Learning Project)」は、欧州評議会の先導する異文化・言語教育のフレームワークをモデルに、主に次の 3 つをキーワードとして、学内の外国語教育の最適化を作業するとともに、研究成果による社会還元を目指すものである。

- a. **一貫教育**：学内における共通参照レベルをまとめ、小中高大間連携の向上と、より高度な英語運用能力の養成を図る
- b. **複言語・複文化能力開発**：文化多様性・言語活動への気づきを促す教育の開発と実践、L3/L4 習得カリキュラムの開発
- c. **自律・協調学習**：生涯学習を支援する社会構成主義に基づく学習環境構築

### 1. 研究拠点：慶應義塾大学外国語教育研究センターについて

慶應義塾大学外国語教育研究センターは、旧慶應義塾大学語学視聴覚教育研究室を改組し、平成 15 年 10 月に発足した。慶應義塾内のすべての学校・大学の外国語教育を支援し、充実させることを目的としている。組織を構成する所員は大学教員のみならず、小・中・高等学校の教員にも及んでおり、小学校から大学院にいたる外国語教育を対象に教育・研究活動を行っている。これは他大学の類似機関にない大きな特徴である。

当研究センターは、慶應義塾における外国語教育のための共通基盤として、新しい時代に対応した外国語教育の研究および教育実践の中心となることをその果た

すべき役割としており、また外国の文化・情報の〈受容〉を主たる目的とした従来の外国語教育に加え、21世紀グローバル社会において複数の言語をもって自らの情報・思想を養うのみならず、同時にそれらの言語で積極的に〈発信〉することができる、〈国際的協働態勢〉を資質として十分に備えた真の国際人を輩出するための教育活動の先導者となることをその社会的使命としている。

我々の活動は〈先導〉・〈推進〉・〈支援〉を3つの柱としている。改組に当たっての最大の目的は、外国語教育に関する研究機能の強化にあった。先導的研究活動が活発に行われてこそ初めてその成果を取り入れた推進・支援活動も十全に機能すると考えたからである。現在では、センター特設科目を通じて慶應義塾大学各学部の外国語教育の補完的役割を果たすとともに、独自の研究活動を通じて、各学部・一貫教育校での実践教育における教育効果を拡大するための支援活動を行っている。またその研究活動においては、幼稚舎（小学校）から学部・大学院にいたる慶應義塾全体の外国語教育に対して将来的指針を与えるという極めて重要な使命も帯びている。支援活動としてはさらに、さまざまな外国語・外国文化関連のセミナーやワークショップ、海外研修を実施し、学生の学習能力の向上のみならず、教員の教育能力の向上にも寄与している。

## 外国語教育研究センター

### 慶應義塾における外国語教育の総合研究拠点



センターの活動の理念的背景としては、「慶應 21 世紀グランドデザイン」( [www.pre.keio.ac.jp/mission/index.html](http://www.pre.keio.ac.jp/mission/index.html) ) の「教育先導」において示された「生涯教育、e-Learning 等多様な教育の場の提供」、「知識・スキル先導」において示された「プロフェッショナル教育を含む新しい知識・スキル総合教育の実施、専門教育との横断教育の抜本的充実、コンテンツの集積と発信等による知識・スキルのあり方の革新」を挙げることができる。さらに「慶應義塾総合先導プラン 2002-2006」の「教育先導」に掲げられた「語力教育の充実」、また「新実業先導」中の「高度外国語教育を含む生涯教育システムの強化」が活動のバックボーンを形成している。

## 2. 問題意識と取り組み

センターはその活動において小学校から大学院までの全学習ステージを包括的に捉え、英語教育を軸として外国語学習の一貫性を高めていき、英語を中心とした複言語環境でのコミュニケーション能力を向上させることを中心的課題として据えている。国際舞台において広く通用するコミュニケーション能力開発の要請に正面から応えるためには、行動中心的タスクベースの学習デザインにシフトすることが必要であると考えられる。またユビキタス化した情報メディアに乗って配信される情報のなかから、ローカライズされた多言語情報を捉え、再発信していくに足る十分な言語運用能力を養成するためには、大幅に異文化交流の機会を取り入れた複言語・複文化能力を開発する教育環境整備が肝要であろう。

以上の認識から一教育研究機関として取り組むのが AOP プロジェクトである。これは 30 年来ヨーロッパで作業されてきた『ヨーロッパ共通参照枠』の策定を中心とする具体的な成果と、その理論的基盤・実践的知見を背景とする、我が国における外国語教育環境の抜本的改善の試みである。企業活動のグローバル化、外国人労働者の流入拡大、国際的情報流通のボーダーレス化など、21 世紀の日本はすでに複言語・複文化状況が現出した段階に入っていると見える。この流れが今後拡大の一途を辿るであろうことは容易に想像されよう。本プロジェクトは、このような状況に対応した外国語教育体制の再構築を行うため、日本の外国語教育が依拠してきたこれまでの枠組みを超え、それらを社会的知識構成主義に基づく新たな教育的パラダイムのもと、緊密に再構成することをその究極目的として掲げている。具体的には、この教育的パラダイムに対応した学習環境整備、そして新たな教員養成体制の確立を目的としている。

## 3. 行動中心複言語学習(AOP)プロジェクトの概要

行動中心複言語学習プロジェクトは 3 つの研究ユニットにより構成されており、それぞれが政策層・教授法層・学習環境層に対応している。以下、プロジェクトの概要を研究ユニットごとにまとめて解説する。

- I . 言語教育政策提言ユニット Language Education Policy Research Unit
- II . 行動中心複言語能力開発ユニット  
Action Oriented Plurilingual Competence Development Research Unit
- III . 自律学習環境整備ユニット Autonomous Learning Environment Research Unit

### 3-1 言語教育政策提言ユニット

本プロジェクト全体の統括を担当するとともに、他の 2 ユニットの成果を踏まえつつ、英語のみならず、日本における外国語教育のあるべき道を探り、政策的提言を行うことを目的とする。具体的には、本研究のモデルとなる欧州評議会の『外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(2001 年)の研究を中心に、言語ポートフォリオの研究も進め、日本型「共通参照枠」(Common Japanese Framework of Reference for Languages = CJF)とそれに基づく一貫性のある外国語教育プログラムの策定を目指す。また、本研究に掲げる新しい理念を体現する教員養成に取り組む。

### 3-2 行動中心複言語能力開発ユニット

#### A) 複言語・複文化能力開発

日本人の複言語・複文化能力開発を目的に、社会的知識構成主義に基盤をおいた、行動中心・課題解決志向の授業プランを策定し、実験授業を行う。一方で、日本での複言語・複文化の状況把握のための調査や、海外の複言語・複文化的地域での言語教育調査なども積極的に進めていく。

#### B) 英語一貫教育

初めて英語を学習した学習者が高度な使い手になるまでの学習過程を見据え、小学校での早期英語教育から、中学、高等学校、大学へとそれぞれの発達段階に応じて、学習がどのように引き継がれていき、指導者側はどのような枠組みで相互に連携すべきかについての諸問題を研究する。具体的には、生徒・学生の英語力の測定・評価法の研究と実態調査を行い、その上で小中、中高、高大相互間の英語教育の接合の問題を研究し、より良い一貫教育のシステム作りを図る。このサブユニットでは、まずは日本における外国語教育史の中で中心的存在であった英語を対象とするが、その研究成果は他言語の教育体制の改善にも資するものとなる。

#### C) 異文化トレーニング

異文化コミュニケーションにおいて、文化摩擦も含めた多様な体験によって、人々が、1. 他人とコミュニケーションを図る際の行動様式、2. 自文化・他文化に対する考え方や態度、3. 自分自身や自分の周囲の捉え方、4. 異文化トレーニングにより異なる文化に対処する能力がどのように変化するのか、またどのような学びを体験するのか、そして人間関係や社会全体にどの程度の肯定的影響をもたらすのかなどについて、テストングによる測定をもとに解明することを目的とする。

### 3-3 自律学習環境整備ユニット

#### A) 自律・協働学習

初等・中等教育、大学教育、そして生涯教育をも含んだ、「学び」という広い領域を対象とし、主体的姿勢をもった学習者を育てる「自律学習」と、他者と交流しながら自らも学ぶ「協働学習」を2つの概念軸に据えて、これまでの外国語教育を刷新するような、教育法・教授法・教材の開発と、そのプログラムへの適応方法を研究する。同時に新しい外国語教育法とスキルを持った教員の養成を図る。

#### B) 学習環境整備

社会的知識構成主義を背景とする教育的パラダイムにおいて、行動中心的な複言語・複文化教育環境創出を、情報化システム基盤構築の観点から総合的に推進する。特に e-Learning のマルチリンガル学習環境の検証と実践研究を行う。また各ユニットが実施する実験授業等を技術面から支援するとともに、独自の教材開発を行う。

### おわりに

AOP プロジェクトは複言語・複文化主義研究および自律・協働学習研究であると同時に、言語教育政策、学習環境デザインのプロセスとして構想されている。言語の枠を超えた、国内外の研究機関との連携を深めつつ活動を推進することが求められている。この場を借りて広くこの研究活動への支援をお願いしたい。(本稿は文部科学省学術フロンティア事業経費の助成によるものである。)